

大綱的指針のもとでの評価への取組によって現れた影響 (効果及び問題点)

研究開発評価の取組によって現れた効果については、省庁及び研究開発機関等の評価実施主体の回答としては、「競争的で開かれた研究開発環境ができてきた」、「国民への説明責任を果たし理解と支持が得られるようになってきた」(Q4A-2)、予算・人材等の効率的な資源配分(Q4A-3)、研究開発施策・課題等の発展や見直しへの活用(Q4A-7,8)、「成果・効果に対するこだわり(結果指向)が生まれてきた」(Q4A-9)などのプラスの影響に肯定的なものであった。一方、研究者等の被評価者の回答としては、「成果・効果に対するこだわり(結果指向)が生まれてきた」(Q4A-9)についてはプラスの影響に肯定的であったが(Q4A-9)、概ね、どちらともいえないといった回答が多く、研究開発評価の取組の効果については、評価実施主体との間で温度差が見受けられた。

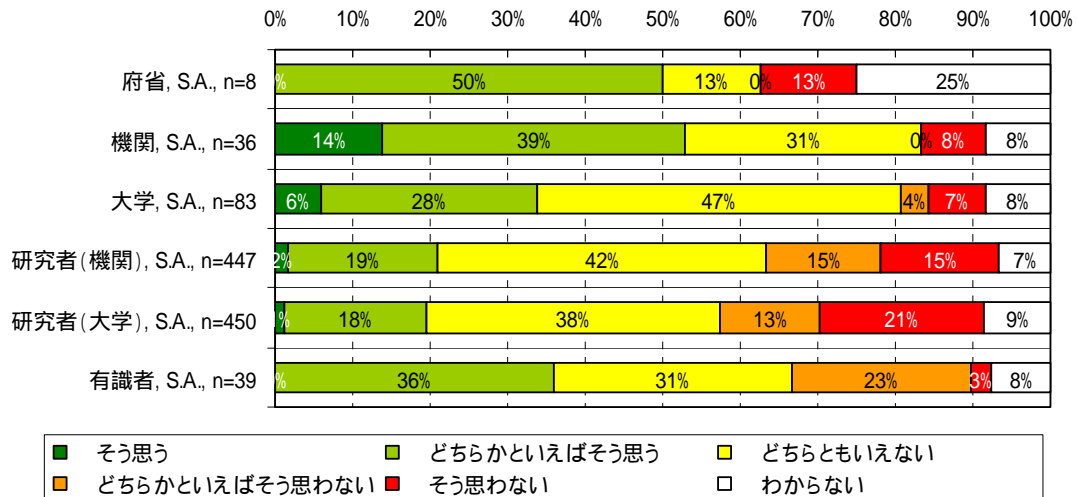
なお、有識者からの回答は全般に評価実施主体と評価者の中間的なものであったが、「国民の視点が常に意識されるようになってきた」ことについては最も否定的であった。

また、問題点としては、評価実施主体及び被評価者の双方で、「評価のための作業負担が過重」と回答している(Q4B-14)が、その他については、評価実施主体側で際立った問題点としては「評価のための資金・人材等の資源が少ない」(Q4B-9,12)、「評価のためにデータベース整備の立ち遅れ」(Q4B-7)等の回答が目立った。一方、被評価者側では、評価実施主体側には少なかった、「評価の形式化」や「評価の高圧的・硬直的運用」などの評価活動のマネジメントの側面(Q4B-1,2,3)、また、「評価結果が研究者の前向きな動機付けに活かされていない」、「評価に対する反発や萎縮が生じている」等の問題の指摘(Q4B-15)が目立った。

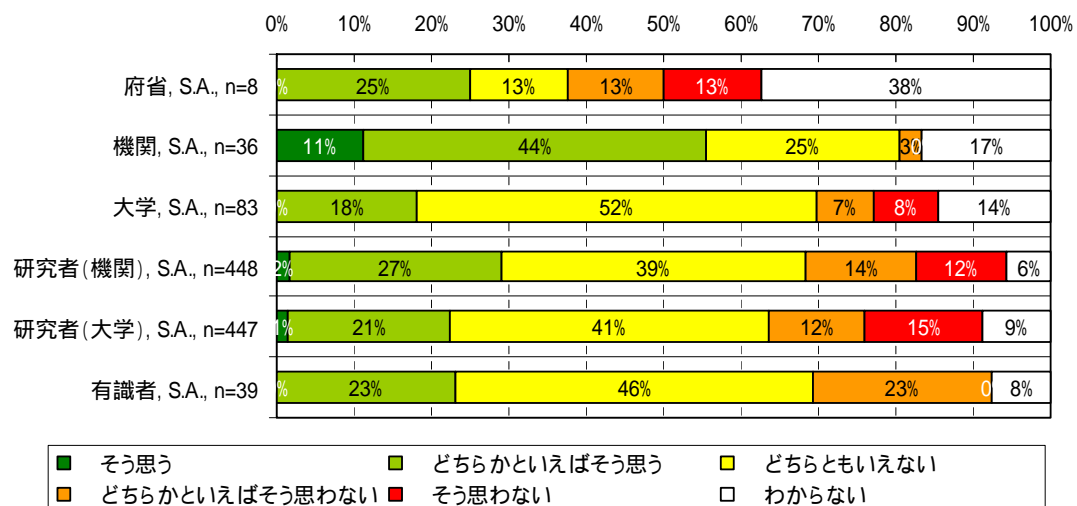
なお、有識者からの回答は全般に評価実施主体と評価者の中間的なものであったが、「評価の戦略的運用ができていない」、「評価への理解不足や関係者の意思疎通不足」への指摘は最も多かった。

大綱的指針のもとでの評価への取組によって現れた影響（効果）

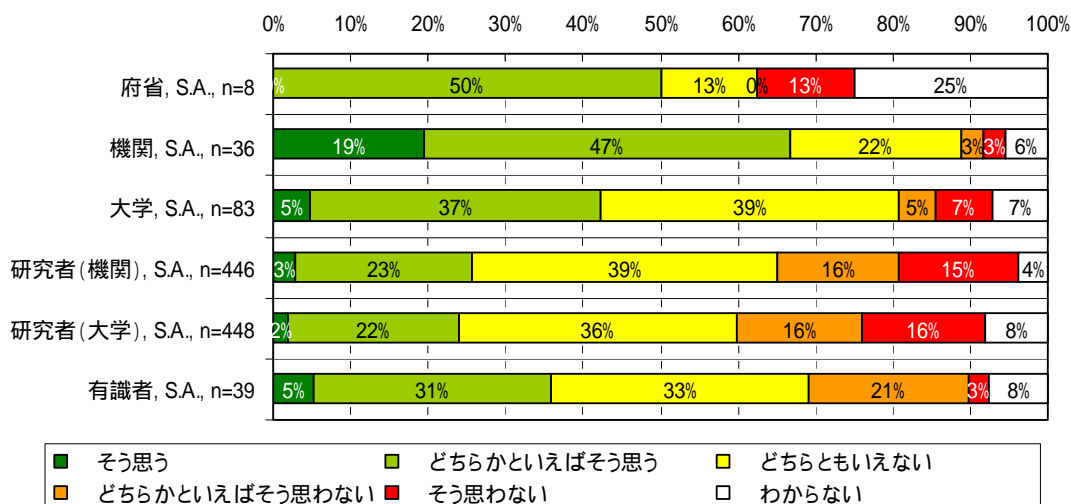
Q4A-1 優れた研究者の能力が発揮できるような柔軟かつ競争的で開かれた研究開発環境ができてきた。



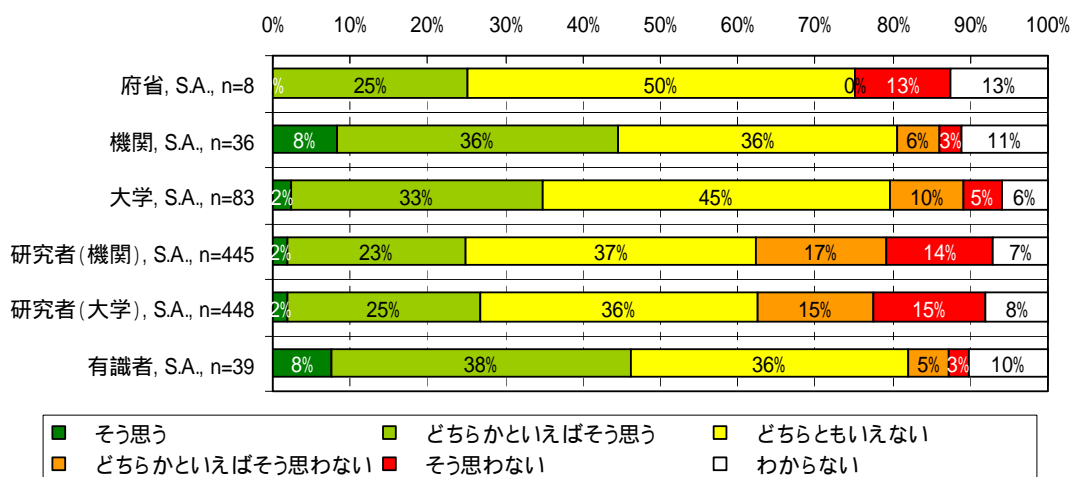
Q4A-2 国民に対する説明責任を果たすことにより、研究開発に国費を投入していくことに関し、広く国民の理解と支持が得られるようになってきた。



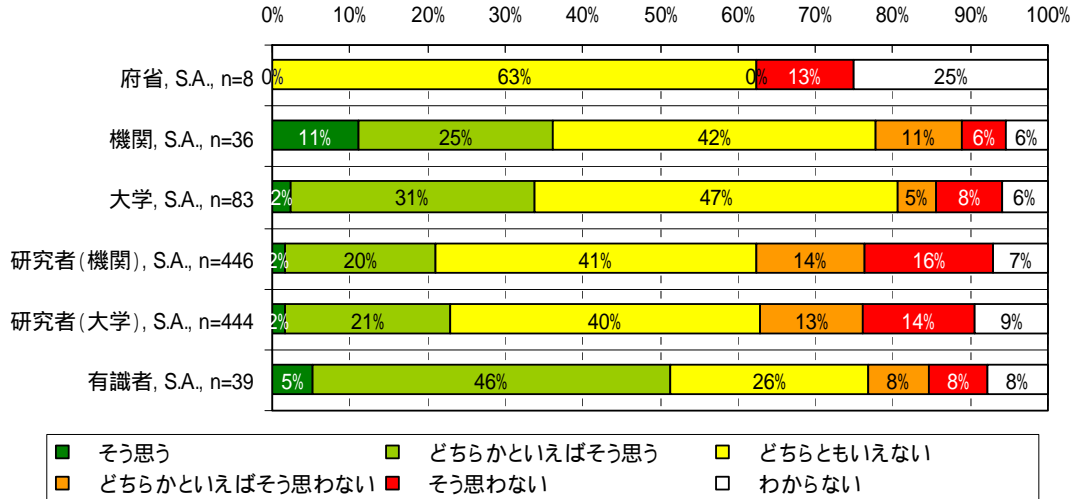
Q4A-3 予算・人材等が、より効率的・重点的に使われるようになってきた。



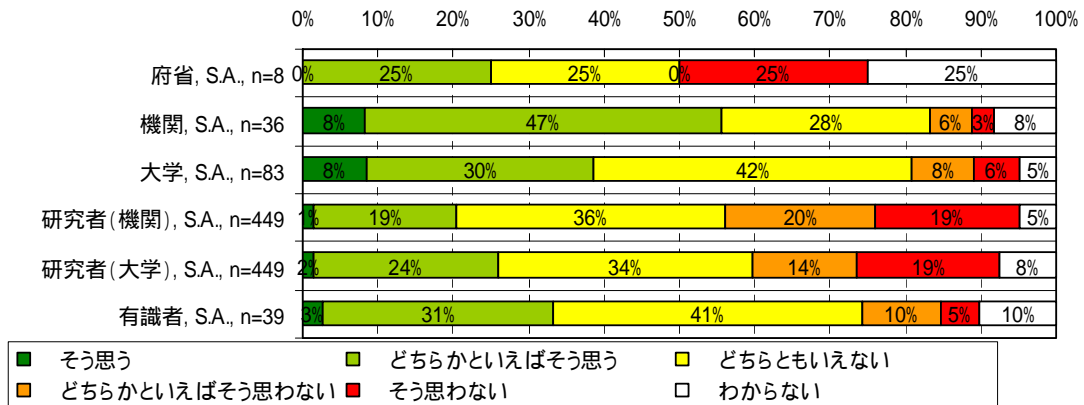
Q4A-4 既存活動の見直しにより新たな研究への取組みの拡大が期待できるようになってきた。



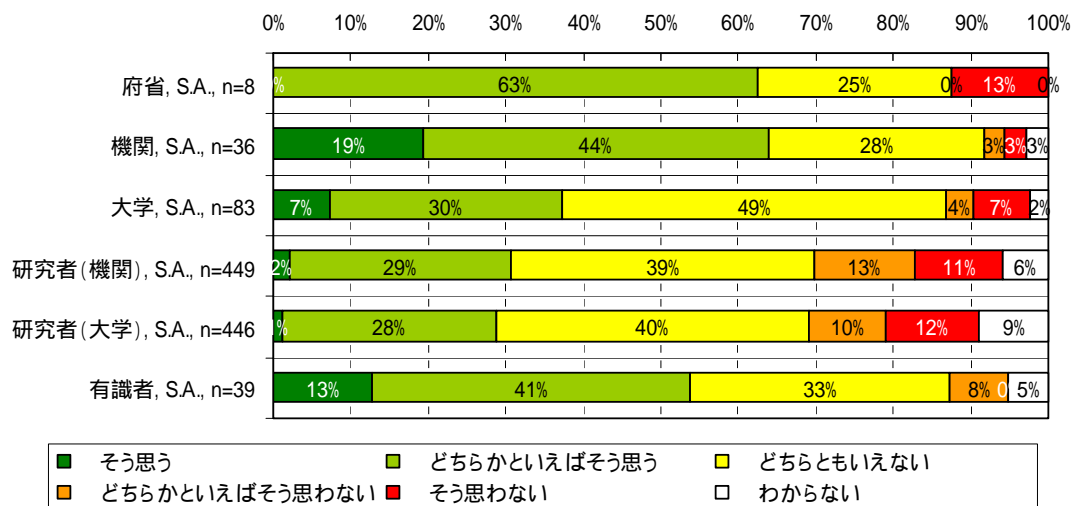
Q4A-5 優れた研究開発や人材を見いだすことができるようになってきた。



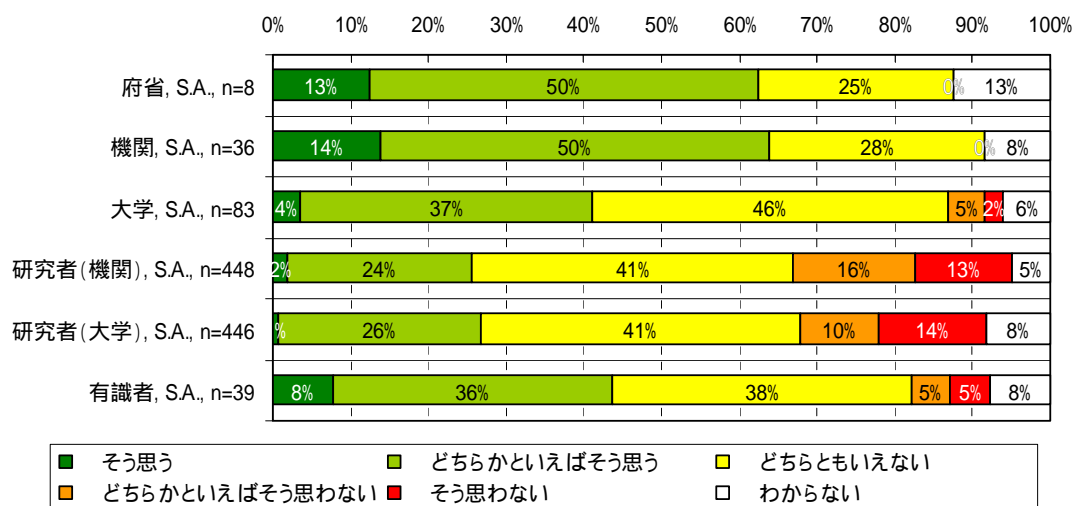
Q4A-6 研究者等を励まし、挑戦することを支援する研究開発環境ができてきた。



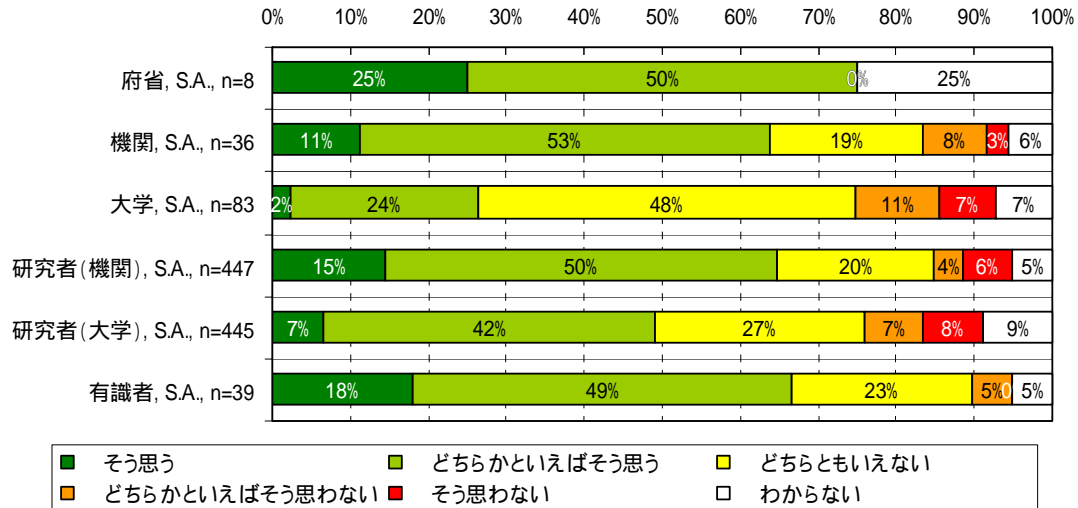
Q4A-7 研究開発施策や課題等の目的・内容を、よりよいものにできるようになってきた。



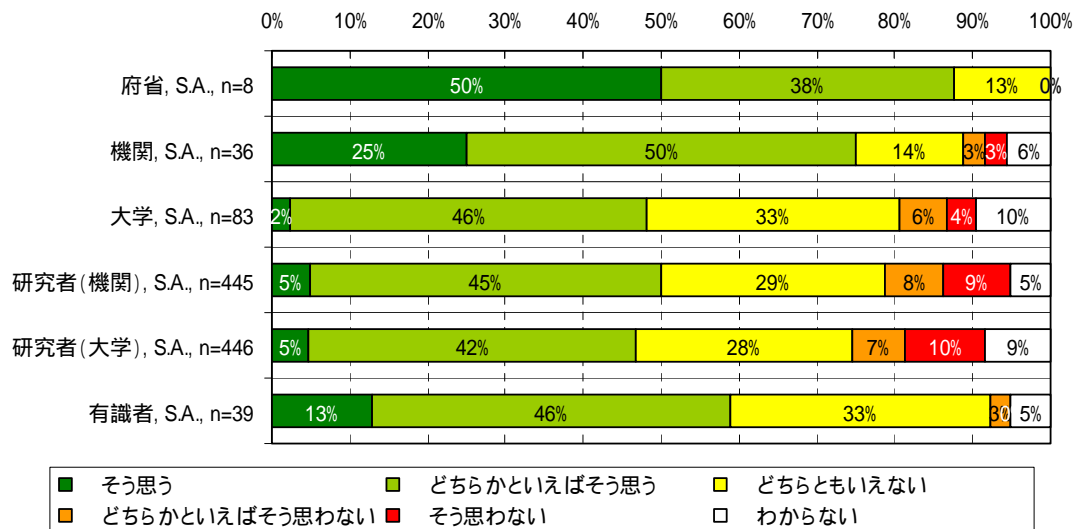
Q4A-8 研究開発施策や課題等に取り組む方法や体制を、よりよいものにできるようになってきた。



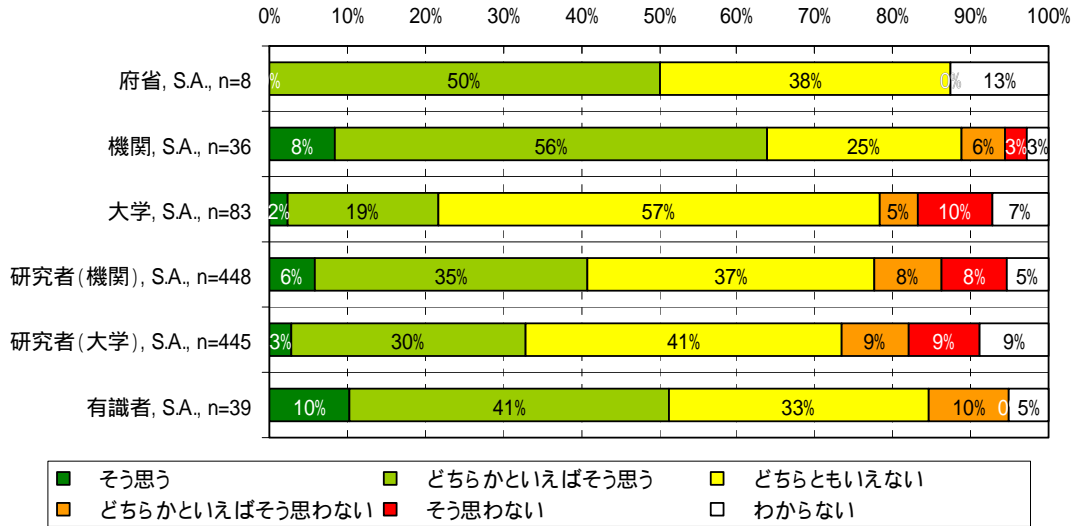
Q4A-9 直接的な成果(アウトプット)や目的に照らした効果(アウトカム)や波及効果(インパクト)に対するこだわり(結果指向)が生まれてきた。



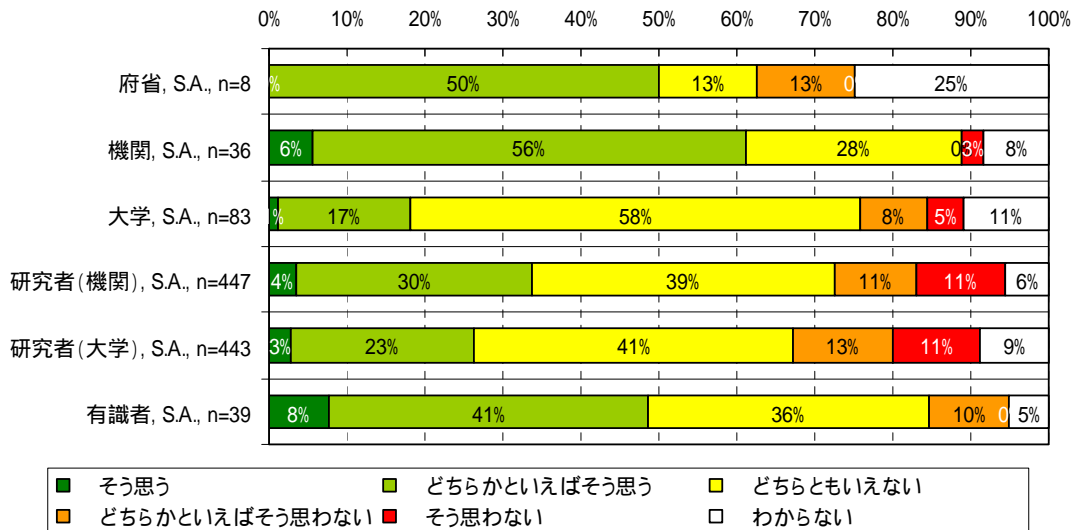
Q4A-10 評価結果を公表し透明性を高めることにより、適切な緊張感が生まれるようになってきた。



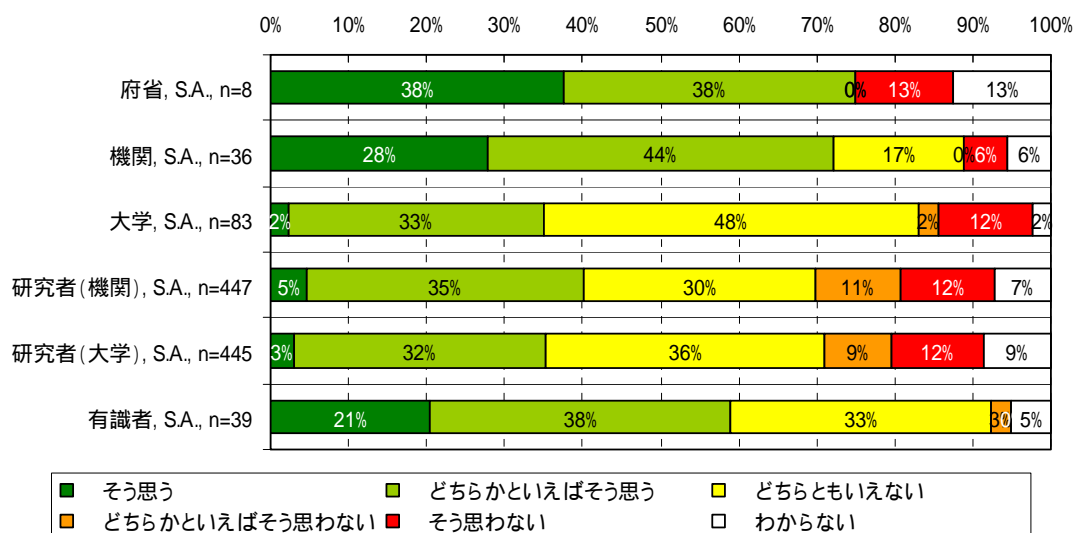
Q4A-11 より広い社会的・経済的な観点から、施策や課題の実施の適否を判断し、見直すようになってきた。



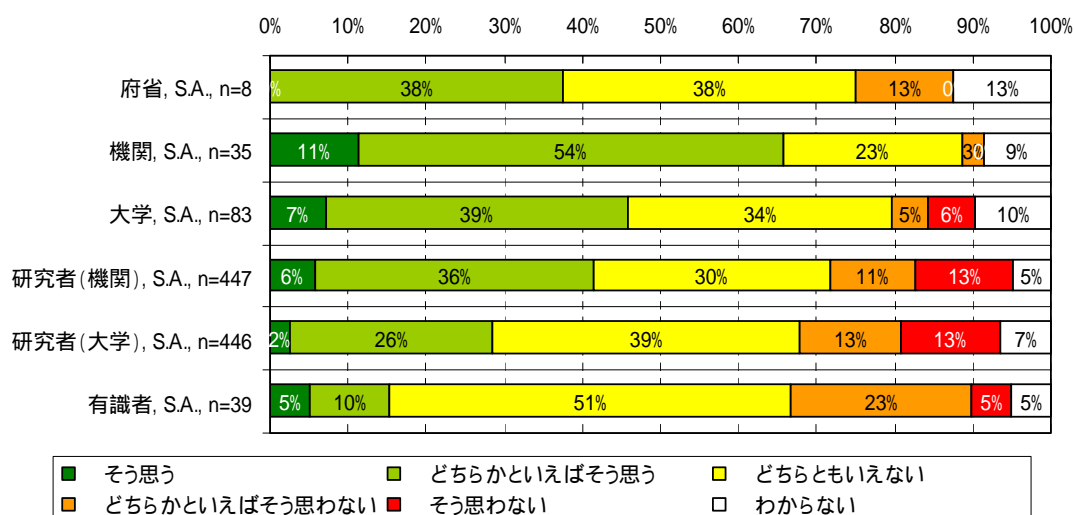
Q4A-12 コストに照らした成果の妥当性という意識をもって、施策や課題に取り組むようになってきた。



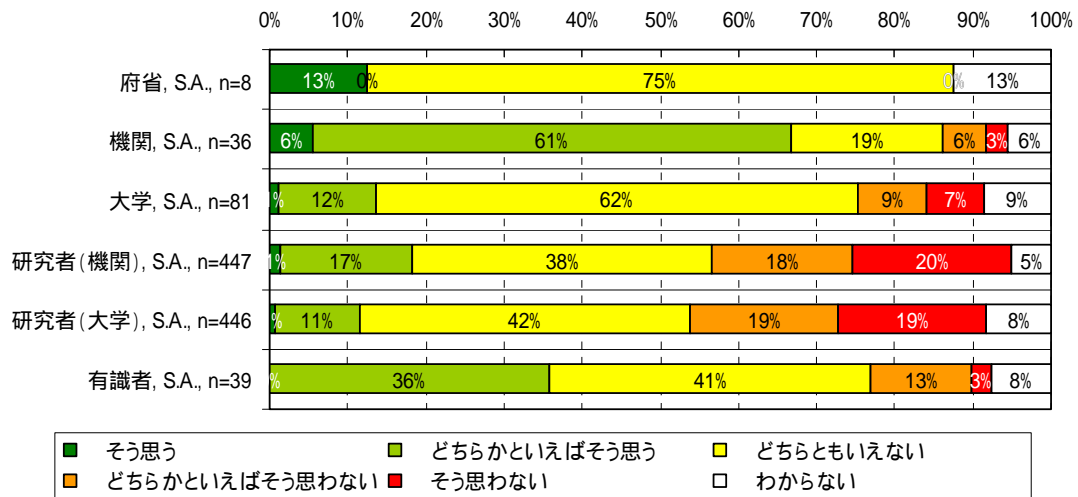
Q4A-13 外部の評価者の意見を求めることを通じて、組織や研究開発が外に開かれ、活動の活性化や外部者による理解が進んできた。



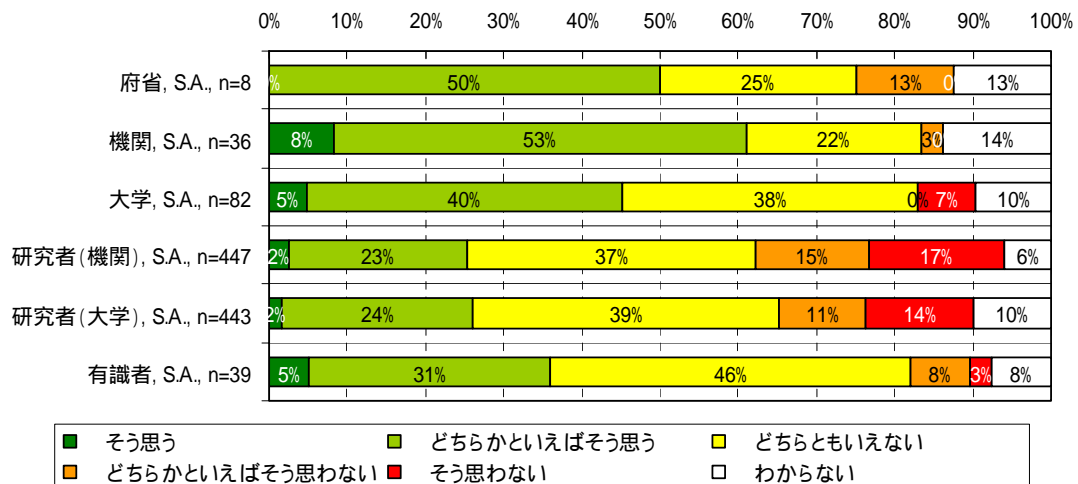
Q4A-14 納税者であり最終的な成果の受け手である国民の視点が常に意識されるようになってきた。



Q4A-15 評価をする組織(管理側)や評価者と評価を受ける研究者等間の意思疎通が向上してきた。

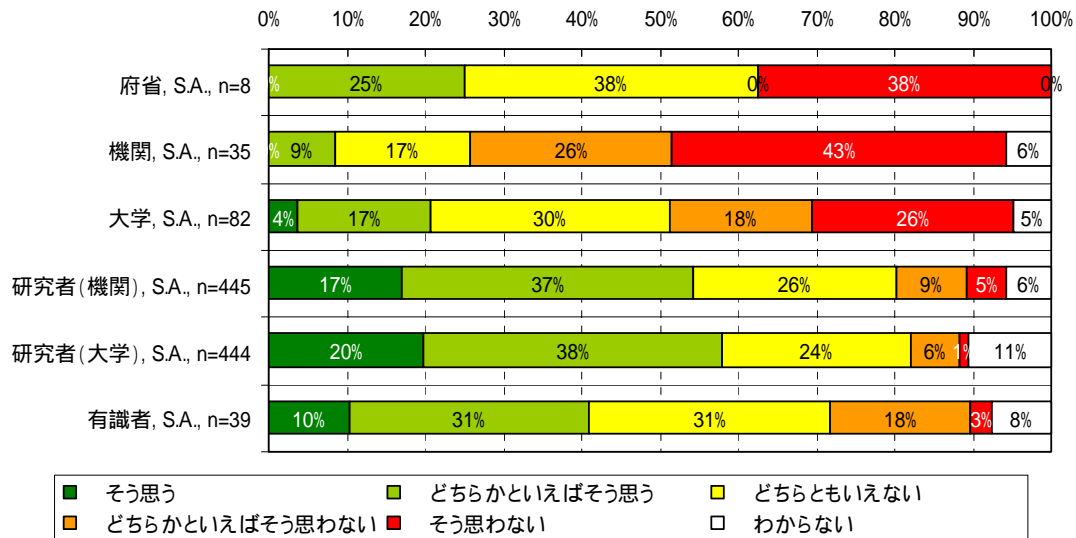


Q4A-16 評価の経験を組織的に学習し、よりよい評価の取組みに活かすようになってきた。

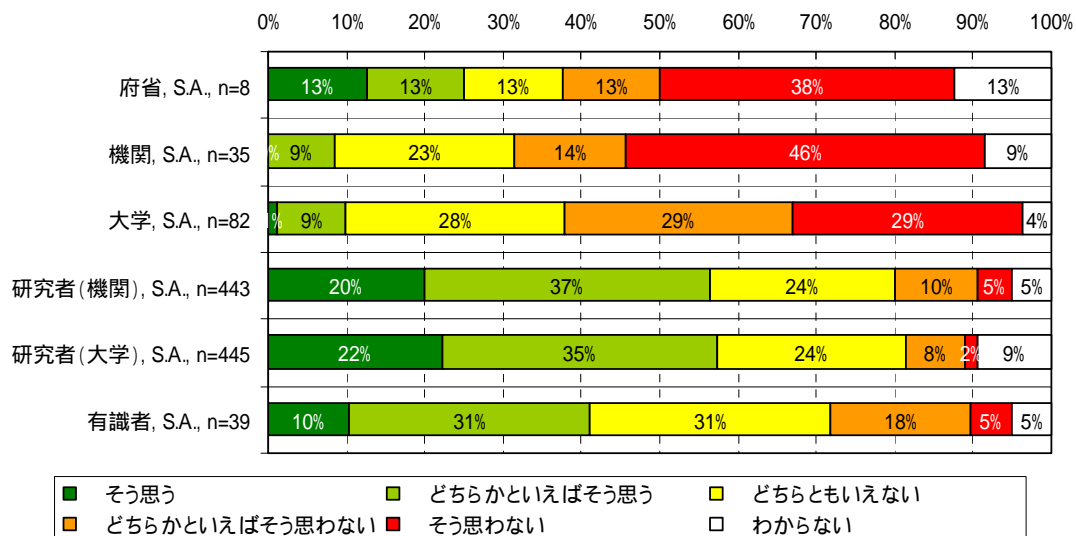


大綱的指針のもとでの評価への取組によって現れた影響（問題点）

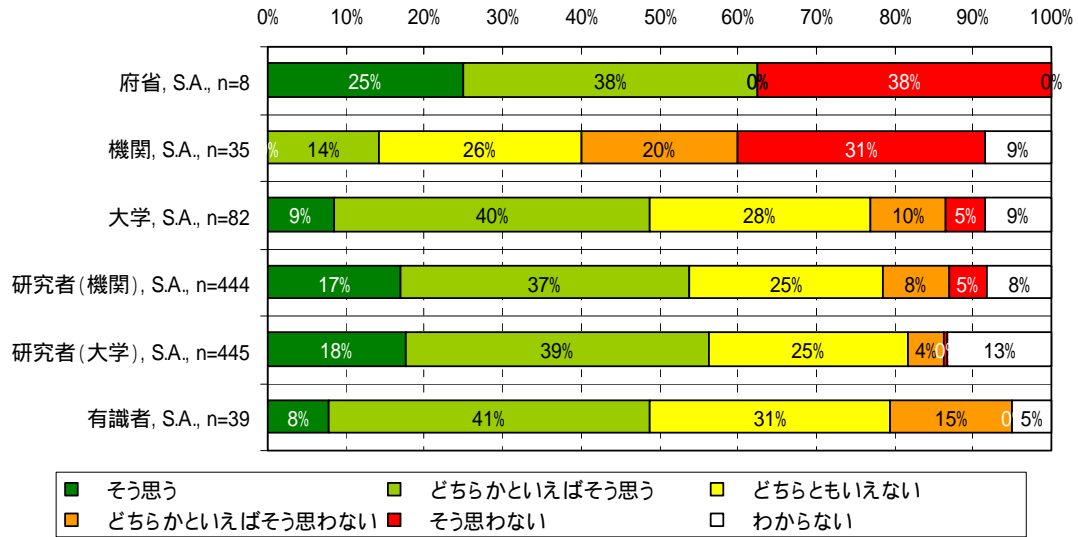
Q4B-1 評価が、その意義や目的に沿って機能せず、形式化している。



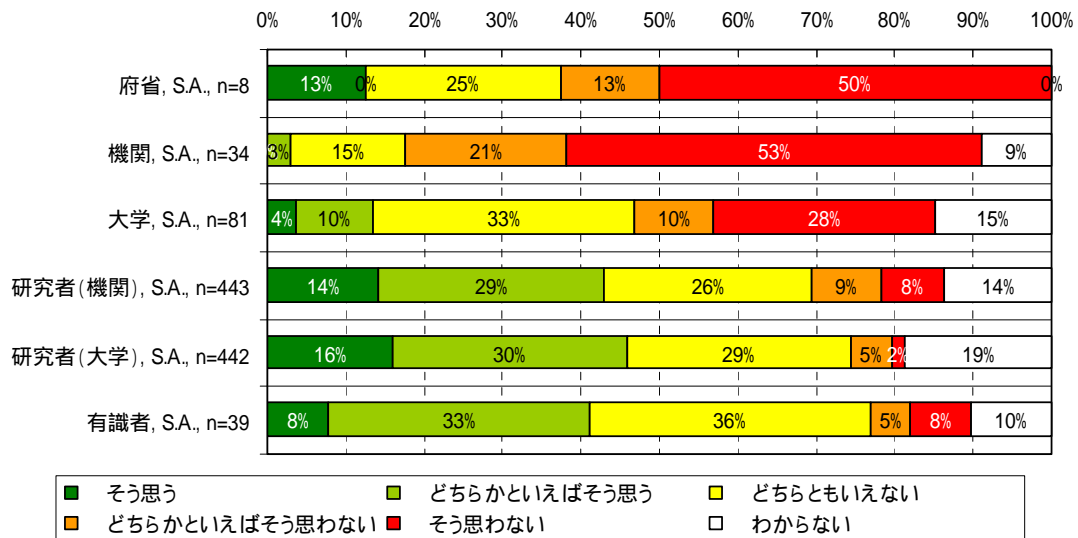
Q4B-2 評価が硬直的・高圧的に運用され、評価に振り回されている。



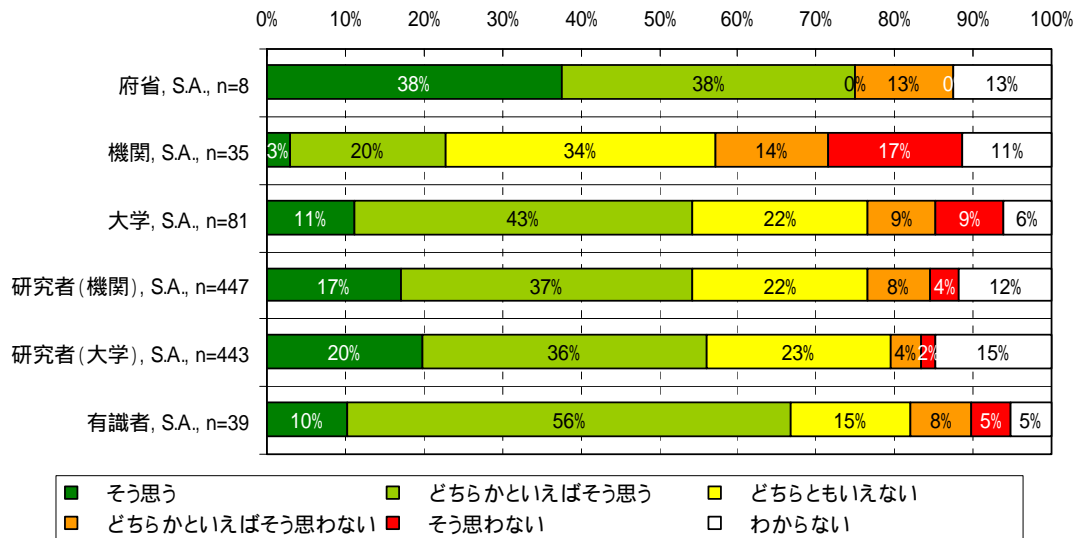
Q4B-3 課題や施策の目的を軸にしたマネジメント・サイクル(plan-do-see(check, action))
が確立していないために、評価が有効に機能していない。



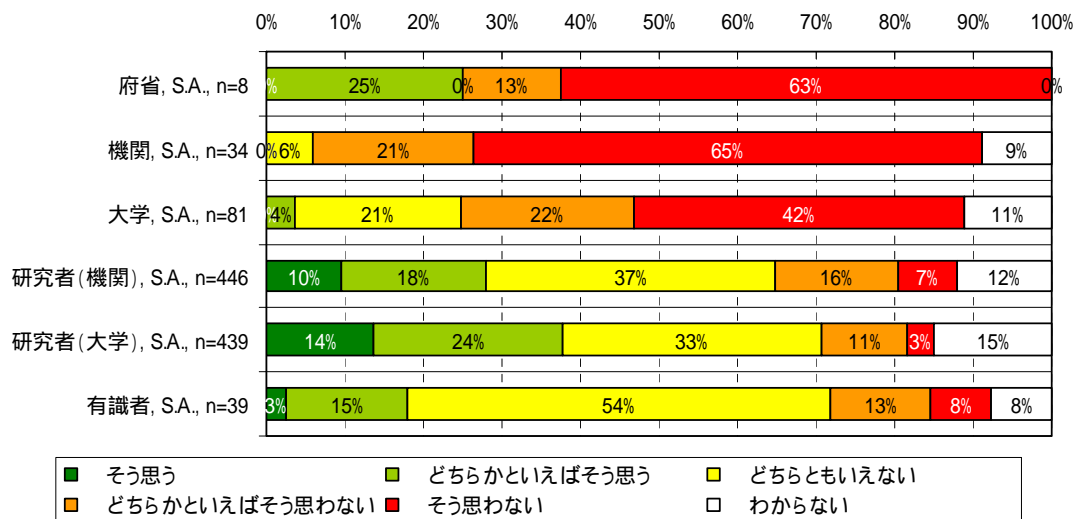
Q4B-4 評価の階層構造が不明確なため、ないし施策の統廃合が繰り返されたために、
評価が困難になっている。



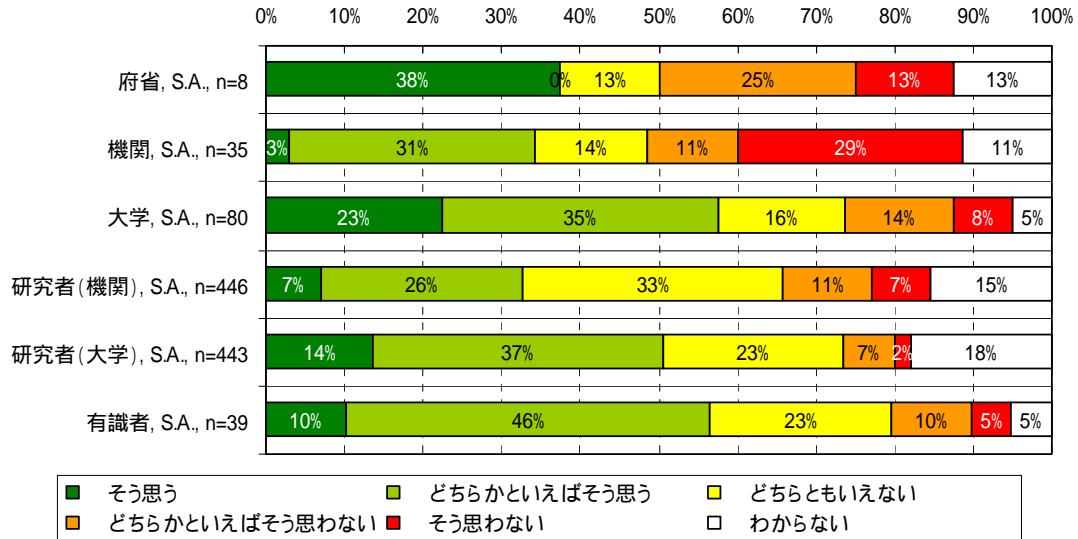
Q4B-5 評価の目的や観点に照らして、利用可能な適切な方法論(調査、分析、評価等)がなかったり、乏しかったりしている。



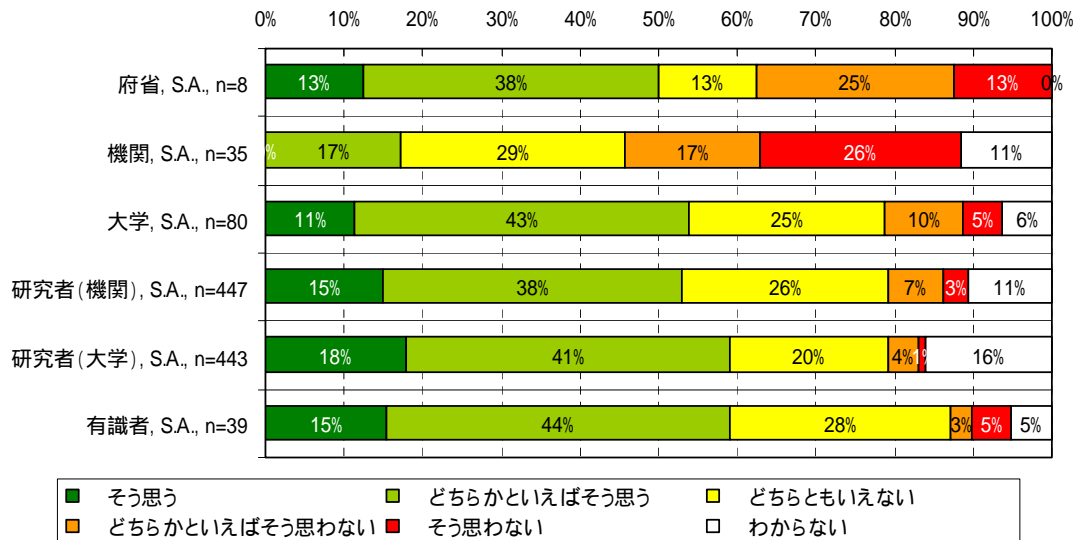
Q4B-6 利害関係の排除など評価のマネジメントが不十分で評価が歪められている危惧がある。



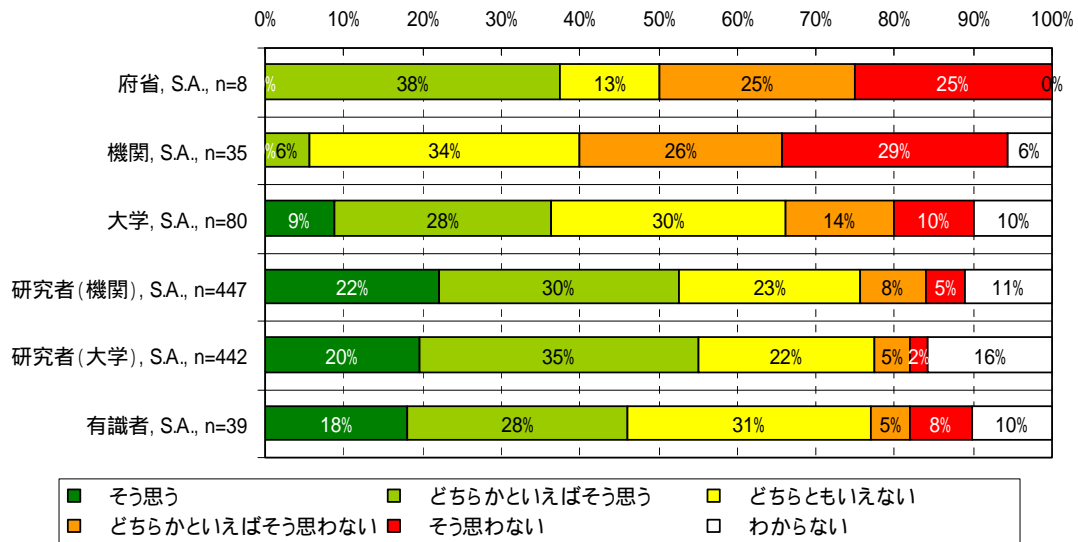
Q4B-7 評価に必要な情報基盤(データベース等)の整備の立ち遅れに直面している。



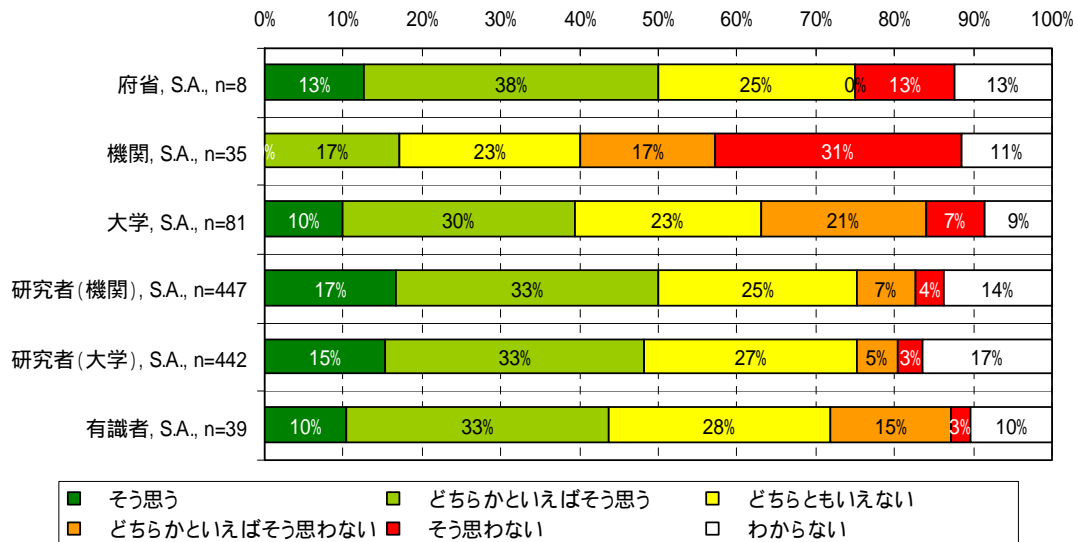
Q4B-8 定性的な評価や定量的な評価の使いこなしができず、評価の客観性や評価結果の導出に弱さが生まれている。



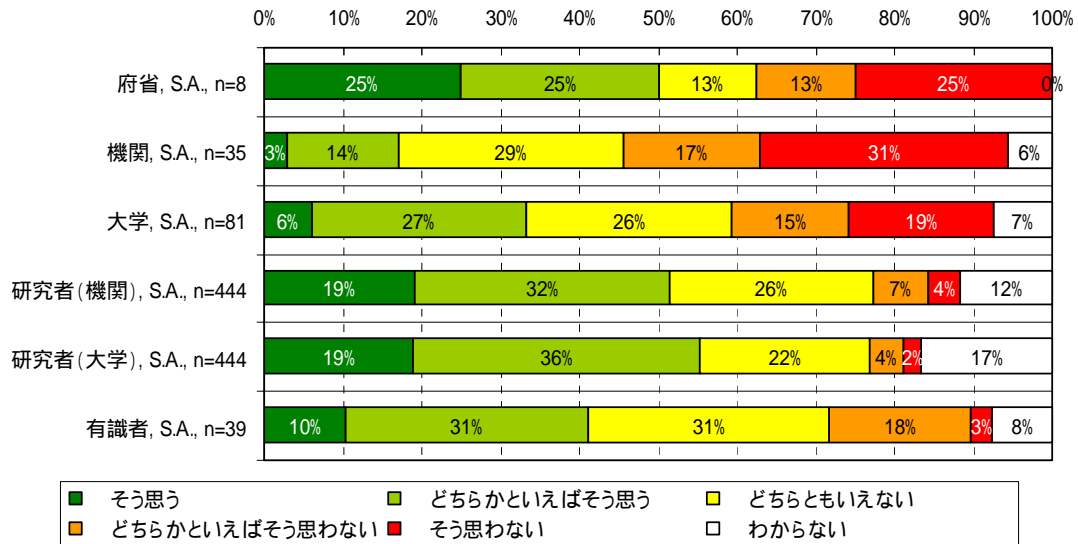
Q4B-9 優れた評価者が不足していたり、協力が得られないでいる。



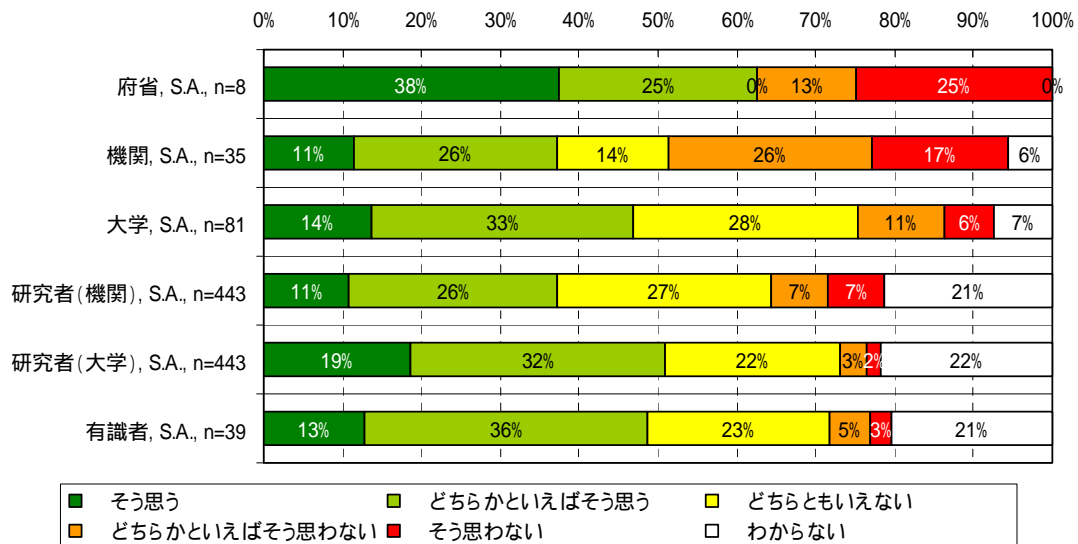
Q4B-10 評価活動を企画・運営・実施する府省内や機関内の、あるいはこれを支援する府省外や機関外の専門性が乏しいために、評価活動が制約を受けている。



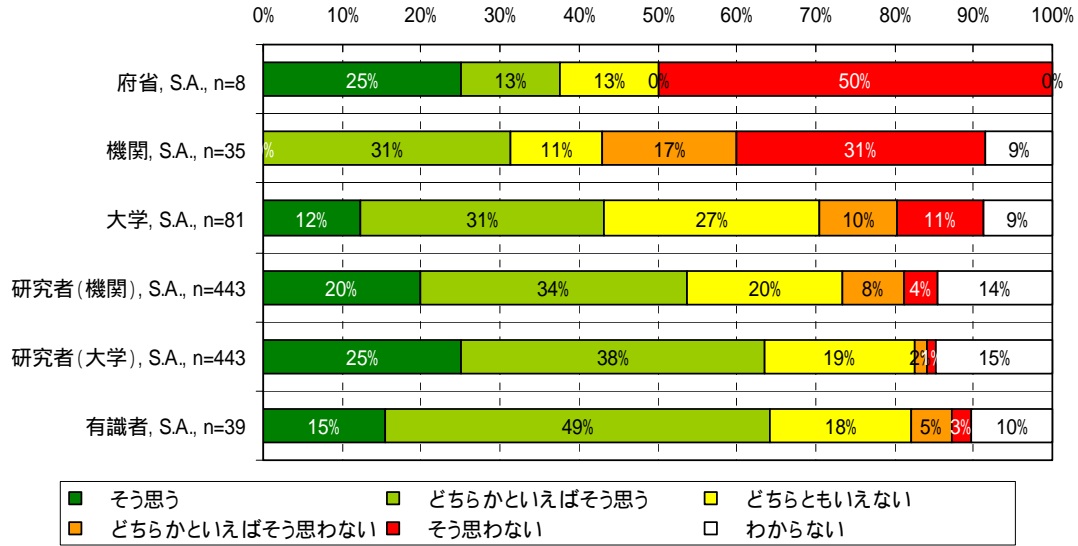
Q4B-11 評価結果が十分に活用されず、評価現場に徒労感が生まれている。



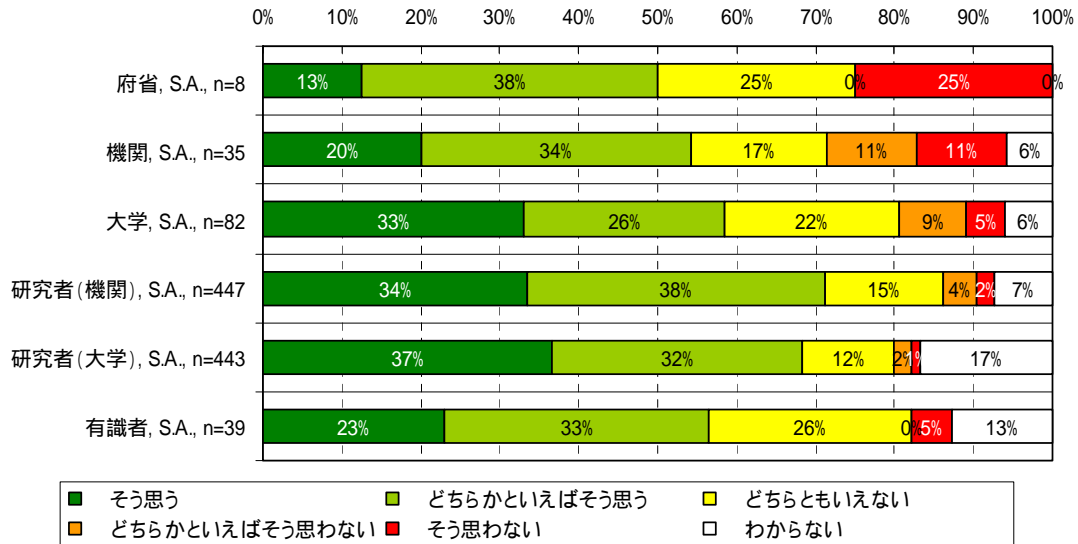
Q4B-12 評価のニーズに対して、評価に使える資金や人材等の資源が少なく困っている。



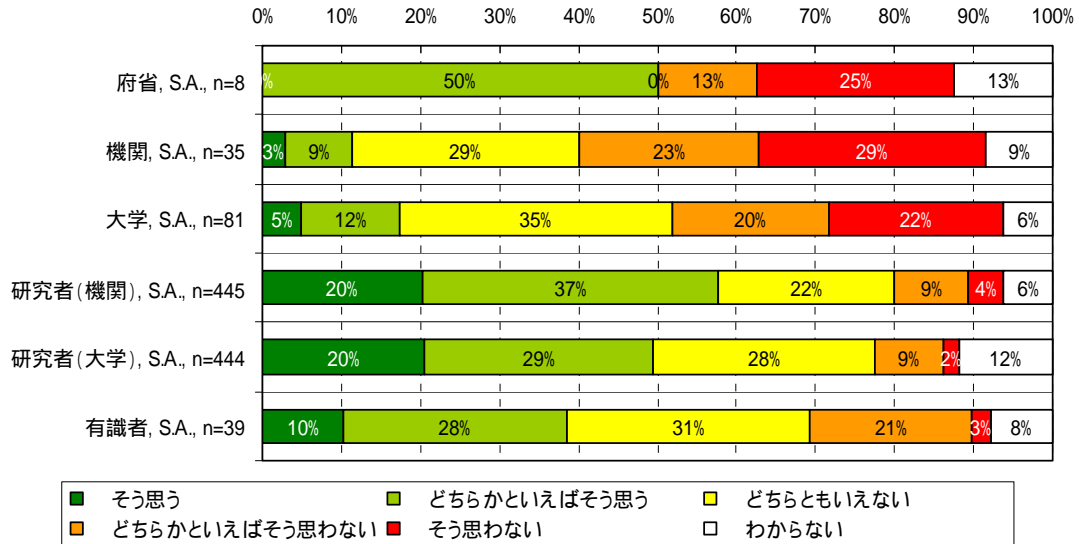
Q4B-13 多重な評価が未整理なまま別々になされたり、当該年度の評価の具体的方針が示されないなど、評価の戦略的運営ができていない。



Q4B-14 評価のために必要な研究者等の作業負担が過重で困っている。



Q4B-15 評価の結果が研究者等の前向きな動機付けになるように活用されず、評価に対する反発や萎縮が生じている。



Q4B-16 評価現場に評価に対する理解不足や評価関係者の意思疎通不足による問題が生じている。

